

教行信証の基礎的研究に関する報告

幡 谷 明

教行信証研究班の当初の課題は、教行信証の章節の共通表示化に置かれていた。それは、東・西両本願寺から、それぞれ近代の学問的研究の方法論および成果を十分に踏まえた真宗聖典が編纂・刊行せられ、現代語訳、更には数種の英訳本まで出版されている現在、教行信証が今后更に国の内外に向けて広く普及されてゆくためには、教行信証の章節の共通表示化が、是非必要であると考えたからである。キリスト教では、バイブルの章節共通表示化は、すでに十三世紀に始められ、十六世紀に決定されて以来、今日では全世界共通のものとなっている。それがどれほどキリスト教の普及にとって重要な役割を果たしたかは説明を要しないところである。そのことを考えるならば、この研究課題の必要性は充分了解される筈のものであり、遅きに過ぎるとすら考えられるものである。研究班では、そのため、次の三班に分けて作業を推進してゆくことにした。

(一) 章節の共通表示化の研究

(二) 原典の研究

(三) 関係資料の蒐集

(一)の章節の共通表示化において、まず問題になるのは、教行信証の構成である。周知のように、教行信証には、真蹟本である東本願寺蔵の坂東本、親鸞在世中の写本である高田専修寺本、親鸞滅後の清書本とされる西本願寺本が第一資料として現存する。これら三本はすべて影印本が

出版せられ、それぞれについて綿密周到な文献学的・書誌学的研究がなされてきた。教行信証の初稿本は東国教化時代の元仁元年以前に成立し、それを書写し推敲せられた草稿本と呼ばれる坂東本は、一応六十二・三歳頃に成立し、その後最晩年に至るまで本文の改訂・増補を行われたものである。高田専修寺本は、平松令三教授によって、その推敲の過程で、建長七年に高田専修寺の開基真仏の門弟専信房専海が見写した教行信証草稿本を、真仏がその数ヶ月後に書写したものとされている。そして西本願寺本は、親鸞滅后十四年を経た文永十二（一二七五）年の書写本であり、清書本と呼ばれるにふさわしいものであることは、よく知られているところである。従って、これら三本の間には、種々の相違点が見られることは、いうまでもないが、その中でもっとも顕著なこととして、坂東本は信巻に本末を分けず、化身土巻に本末を分けているのに対し、専修寺本・西本願寺本は、信巻、化身土巻ともに本末を分けていないということがある。但、専修寺本は、信巻の中間にある信一念釈ならびに化身土巻（末）の第一行目の頭注に細字で末始と記しているが、これが本文と同筆か否か、またその記入の時期および理由等については、不明という他はない。そのような三本の間の相違の問題は、延書の十七冊本・十九冊本・二十冊本、および多数の書写本、あるいは版本とも関連する問題である。その点からしても、章節を的確に分けることには、随分問題があり、そのためには、内容の十分な検討・把握が必要とされる。そ

のための基礎的作業として、東・西・高田三派における伝統宗学の学系の調査、および学匠の科文を検討する必要が生じ、江戸期の講録類を可能な限り蒐集し、科文の調査・検討を進めた。判読し難い数多くの写本の一つに直接当たって本文の中に書かれてある科文の部分抽出し、それを更に図式化することは、大変な苦勞を要することであるが、畑辺研究補助員によって、その面倒な作業は精力的に行われた。それによって、あるいは、三派の宗学の特徴、あるいは各派の学系の特質等も明らかになるのではなからうかと考えられるが、今回の報告では、大谷派について占部観順師までにとゞめざるを得なかった。勿論、章節の研究については、明治以降の諸研究についても検討されなければならないことは説明を要しない。しかし、膨大な数に及ぶ文献に満遍なく当って検討することは、實際上不可能である。そこで、九十年の生涯を教行信証の研究に捧げられた近代の碩学金子大栄師について、研究の進展推移の跡を辿りながら、その構成論を説明することにした。そのため、教行信証に関する師の研究論文のすべてを蒐集しその構成論を考証することを、畠山研究補助員によって行った。近代における教行信証研究に関する考証は、今後更に種々の角度からなされなければならない問題である。

初めに触れたように、章節の共通表示化という課題は、国の内外に向けて、教行信証を公開し普及するという、現在の且つ将来的展望のもとで計画されたことであり、そのような願いの一端は、これまでに出版せられた七種の英訳本となって具体化されつゝある。安富研究員の報告は、それら英訳本の内容を詳細に検討し、翻訳上の問題点について論証したものである。

これも初めに少し触れたことであるが、章節の共通表示化を行うためにも大切なこととして、テキストの完成という問題がある。『定本親鸞

聖人全集』「教行信証」が昭和三十二年に刊行されて以来すでに久しい。しかし、今日のような条件のとのわかない時期に作成されたものであり、不備な点が残されてあることは、これまでも指摘せられてきたところである。その不備な点を修正して、定本として完璧に近いものを作ることは、学界急務の課題であることは、言をまたない。これまで、故中井玄道師を初として、多くの学者によって教行信証の書誌学的・文献学的研究がなされてきた。そしてそれらの研究成果に基づく聖典が東・西兩本願寺から出版されているが、綿密周到に行われたそれらの聖典においても、なお完璧とはいえない切れない問題が残されているように思われる。刊行されて以来、そのままになっている『定本親鸞聖人全集』について、それを厳密に修正し完璧を期することは、必ずしも容易ではないといわざるをえない。

(二)の原典研究では、定本と第一資料の三本を綿密に校異することにし、卷子本に書かれた大集経要文の長文を、一部は卷子本のまま、一部は切断して坂東本に袋綴として綴じ込んだ箇所があるとともに、本末に分巻されていて、内容的にも問題の多い化身土巻(末)について、その作業を行った。それには、まず坂東本の行数・字数・字体・圈発(声点)をそのまゝ、原稿に写し、他の専修寺本・西本願寺本の二本と、坂東本の影印本では不明な朱書が窺える丹山本二本を校異した。丹山本は、すでに真蹟集成の出版の際にも参照されており、その経緯については赤松俊秀・多屋頼俊博士の解説に述べられているが、丹山本には高倉学寮本と丹山文庫本の二本があり、その朱書は完全に一致しない箇所があることから、その二本を校異した。しかし、現在では坂東本の閲覧が不可能なため、その最終的な確認ができなかったことは、遺憾である。そして更に、親鸞滅后三十年の正応四(一二九一)年に版行された八冊本の正応

本の系統を引く寛永版を初として、正保版、明暦版、寛文版（九年と十三年刊行の二本）、天保版の六種の版本との校異も行うことにした。これはすでに中井玄道師によって行われ、近年では重見一行氏の詳細な研究成果が発表されているところであるが、それらに準じ、それを確認するために行ったものである。但、校異において重要な意義をもつ竜大図書館蔵存写本および蓮如写本が閲覧できなかったのが残念である。

教行信証は文類であり、化身土巻（末）にも、涅槃経・般舟三昧経・大集経・弁正論等数多くの経論釈が引用せられている。その引文については、中井玄道師が、改点例・省略例・更改例・添加例・合糅例・顛倒例・前後例の七例を挙げて、その一々を明示し説明を加えられている。その点を考慮して、当初は引文につき、涅槃経の南北両本・般舟三昧経の三本校異を行い、広弘明集と所引の弁正論との校異等も行った。大正蔵経については、そこに対校本として挙げられている宋・元・明版、および宮内庁本等との校異も行ったが、親鸞の所依本が何であったかを事実として確認できないという基本的な限界がある以上、親鸞の写誤脱落等を判断することには、慎重でなければならず、最終的な結論を下すことは、極めて至難という他はないように思われる。これらの骨の折れる作業は、尾崎秀行・辛嶋静志・佐藤智水・武田定光・鳥越正道研究補助員が分担して行った。親鸞の著述全体では二百五十種にも及ぶ異体字・圈発（声点）・朱書等をそのまゝ、写し、それを底本として他の二本を対照したものを翻刻することは、種々の事情から不可能かも知れないが、教行信証の学問的研究のためには必要なことと考える。

(三)の関係資料の蒐集は、殊に研究所の側からも強く要望せられたものであり、竜大図書館所蔵本を含めて、主たる講録類を蒐集した。その中には、金信研究補助員の資料報告にみられる高田派秘蔵の普門の発覆鈔

も含まれている。百巻に及ぶ大著であるこの書は、寛文十一（一六七二）年から延宝（一六七三―一六八二）年間にかけて著わされたものであり、近世における教行信証研究の先駆をなすものとして、歴史的価値の高いものである。近代における親鸞研究文献目録は、すでに名畑崇教授によって『理想』（第五六九号 一九八〇年一〇月）に報告されているが、それを本にして明治から昭和五十六年度末までのものを細大洩らさず探索することに努め、藤嶽研究員を中心に、池田理・篠原恵信・石川正穂・河野秀典・渡辺智洋・佐藤智行の六名の学生諸君の協力を得て蒐集・カード化し、発表年代順と雑誌別の二通りの論文目録を作成することができた。この作業は、何等かの態でもって、今后も継続されるべきものである。

以上が、二年間にわたる共同研究の経過のあらましである。当初の研究課題であった章節の共通表示化からは二転・三転したともいえるが、それらは限られた期限・研究費・スタッフでもって、作業を推進していく過程の中で、必然的に転移していったことである。今后、更にこの研究作業が当初の目的を達成するまで継続して行われることを強く要望するものである。